



2016年

米大統領選の結果分析¹

にしかわまさる
西川 賢

(津田塾大学国際関係学科教授)

はじめに

2016年11月8日に行われた米大統領選挙において、ドナルド・トランプ氏が第45代大統領に選出された。今回の選挙について、すでにおびただしい数の論考が発表され

ている。だが、選挙の是非や意義について過度に抽象的な論議を交える以前に、まずは選挙結果の概要をデータに基づいて把握し、分析するという基礎作業が必要ではないだろうか。

選挙結果の概要

一般得票でヒラリー・クリントン氏は6083万9千票あまりを獲得したのに対して、トランプ氏は6026万5千票あまりを獲得している(表1参照)²⁾。ここで民主党・共和党候補の一般得票数・得票率、投票率を比較してみると、2016年の選挙は投票率が過去3回の選挙よりも低く、本選挙での投票を棄権した有権者が多かったことが分かる。カール・ローヴが指摘しているように、今回の選挙では投票率が上昇するのではとの予測が少なくなかっただけに、投票率が下がったことは想定外だったといえよう³⁾。特に民主党の一般得票数は前回よりも500万票以上も減っており、共和党の一般得票数(66万票余り減少)に比べて圧倒的に減少数が大きい。

表2に明らかのように、州ごとに見た場合でも2012年と比した場合、2016年選挙において共和党の票が増えたのは33州であるのに対して、民主党の票が増えたのは5州にとどまり、しかも43州で前回よりも得票率が下がっている。

また、ニューヨーク・タイムズ紙による今回の選挙の出口調査の投票内訳を見ると、2008・2016年の選挙でオバマを支持してきたラティーノ(前回比6ポイント減)、アジア系(前回比8ポイント減)、黒人(前回比5ポ

イント減)などの「オバマ支持連合」、ならびに18〜29歳の若年層(前回比5ポイント減)の得票率が軒並み下がっている。2012年時点でのデータを参照すると、18〜20歳の有権者登録率は44%、21〜24歳で53%、25〜34歳で57%程度と、若年層の政治参加への意欲はもともと高いとはいえない。さらに、階層別の投票率をみると18〜20歳の投票率は35%、21〜24歳で40%、25〜34歳で46%、ラティーノで48%と低く、黒人でも62%程度にすぎない。すなわち、ただでさえ有権者登録率・投票率の低い支持層の票を前回選挙よりも共和党に奪われているのである(Stanley and Niemi 2015)。

なぜ民主党の一般得票数は減り、多くの州で票が減って得票率も前回より下がり、マイノリティや若年層の票を奪われたのだろうか。リアル・クリア・ポリティクス調査では選挙直前の10月28日から11月7日にかけての調査でクリントン氏を「好ましい」と回答したものは41・8%、「好ましくない」と回答したものは54・4%にのぼる。国務長官時代のメール問題、FBIの捜査問題、そして夫であるビル・クリントン氏の性的スキャンダルも含め、属人的なマイナスイメージが悪影響したことは否定できないだろう。あるいは、彼女が白人であることや女性であることがマイナスに作用した可能性も考えられる。

なお、各州の得票差・得票率差を見ていくと、全体のバ



西川 賢 (にしかわ・まさる) 津田塾大学学芸学部国際関係学科教授。1975年9月兵庫県生まれ。日本比較政治学会理事、日本選挙学会理事。東京財団・現代アメリカ研究プロジェクトメンバー。専門は政治学、アメリカ政治研究。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後(99年)、同大学院博士課程を修了(2007年)。博士(法学)。フルブライト・フェローとして渡米後、日本国際問題研究所研究員、九州大学客員准教授、一橋大学客員准教授などを経て、11年4月津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授、16年10月より現職。著書に、『ニューディール期民主党の変容—政党組織・集票構造・利益誘導』(慶應義塾大学出版会、2008年)、『分極化するアメリカとその起源—共和党中道路線の盛衰』(千倉書房、2015年)、『ビル・クリントン—停滞するアメリカをいかに建て直したか』(中公新書、2016)など。

タインから逸脱している事例とおぼしき州が散見される。

まず、ユタ州で共和党の票数が前回に比べて34万3千票以上も減っている。これは無所属候補として出馬していた、エヴァン・マクマリソン(元CIAのエージェント)で、ユタ州に多いモルモン教徒でもある)というダーク・ホースが終盤に勢力を伸張させたためである。マクマリソン氏は人工

妊娠中絶反対・同性婚反対、自由貿易支持、同盟国に対する安全保障上のコミットメントの維持拡大など、比較的「オーソドックスな共和党」の立ち位置に近い政策スタンスを取っており、最終的に17万票あまりを獲得した。マクマリソン氏はトランプ氏の票を吸収したとみられるが、それでもトランプ氏は勝利を収めている。

第二に、テキサス州では民主党が55万票あまり、共和党が11万票あまり票を増やしている。これはなぜなのだろうか。原因として他州からの人口流入、ラティーノ人口の増加、自然人口増など様々なものが考えられる。

他州からの人口流入に関しては、テキサス州の人口に州外生まれの人々(他州からの移住者+外国人)が占める割合は39・5%で全米平均の45・3%を下回っており(Holbrook 2016)、これが原因とは考えにくい。また、同州のラティーノ人口は1千万人を超えており、2010年から2015年で100万人以上増えている。だが、同州におけるラティーノの民主党得票率は前回より低下しているという報道もあるので、ラティーノ人口の増加が民主党増加の真の原因かどうかは判然としない。いずれにせよ、確かなことは州別の詳細な有権者データなどが整備されなくては分からないであろう。

州ごとに見た選挙結果

次に州ごとの選挙結果をより詳細に検討してみよう。

表3は1972年から1980年までと、2004年から2012年までの各州の政党支持パターンの変化を比較したものである。オハイオのように政党支持が拮抗したまま、ほぼ変化していない例外的な州もあるが、殆どの州では共和党支持、民主党支持のいずれかに支持が傾いている。共和党はニューヨーク州やマサチューセッツ州やコネチカット州など、中部大西洋沿岸州（ニューヨーク州やペンシルベニア州など）、太平洋沿岸州（カリフォルニア州やワシントン州など）で勢力を弱め、南部、プレインズ諸州（カンザス州やネブラスカ州など）、ロッキーマウンテン諸州（アリゾナ州やユタ州など）で民主党を凌駕している（Stanley and Niemi 2015）。

今回の大統領選挙の結果について、各種世論調査やメディアによる選挙予想が軒並みの中しなかったことを批判する意見も多い。だが、今回の各州の勝者予想については、ほとんどの州で事前の予想通りの結果が出ている点は注意しておきたい。ノースカロライナ州とフロリダ州は結果的に共和党が制したが、両州は事前の予想では勢力拮抗（Toss-Up）であったため、トランプ氏が勝ったとしても驚きではない。表2から分かるように、ノースカロライナ

州では民主党が前回選挙から1万6千票以上も票を減らす一方、共和党が6万9千票余り票を伸ばしている。フロリダ州では両党ともに2012年の選挙よりも票を伸ばしているが、共和党は増分で民主党を凌駕し、勝利を収めている。

同志社大学の飯田健准教授が指摘するように、統計学的に誤差の範囲を考慮した上でもクリントン氏が勝るとされながら、実際に敗北を喫したのはミシガン州、ウィスコンシン州、ペンシルベニア州である。これはクリントン氏にとっては大きな痛手であった（飯田 2017）。

表3に明らかのように、ウィスコンシン州、ペンシルベニア州は1972年〜1980年に比べると近年共和党支持が強まりつつある州の一つであり、トランプ氏が勝利したことも不思議ではないのかもしれない。だが、最大の例外と考えられるのは、かつてに比べれば民主党化が進んできたはずのミシガン州である。ミシガン州でのトランプ氏の勝利という現象をどのように説明すれば良いだろうか。

ミシガン州の選挙結果に大きな影響を及ぼしたと考えられるのが第三政党支持層の影響である。今回の選挙では二大政党の候補のいずれを支持するか決めていない、あるいは第三政党の候補を支持すると回答した有権者が全体で12%以上にのぼった。これは歴史的な接戦であった

2000年の大統領選挙の9・6%を上回る大きな数字である。結果的に第三政党は750万票あまり（得票総数の5・5%）を獲得したが、これは1996年以来の躍進である⁴。

ミシガン州の選挙結果は共和党が227万9221票、民主党226万7798票でわずか1万1423票差である。同州ではリバタリアン党が17万3023票、緑の党が5万690票を獲得している。同じくウイスクンシン州でも両党の得票差は2万7257票でリバタリアン党が10万6442票、緑の党が3万980票を取っている。ペンシルベニア州でも6万8236票差、リバタリアン党は14万2653票、緑の党が4万8912票を獲得している⁵。

くわえて、前回選挙に比して、ミシガン州では民主党票が29万6千票あまり、ウイスクンシン州では23万8千票あまり、ペンシルベニア州では14万5千票あまり減っており、民主党はもとより劣勢に立たされていた。

リバタリアン党の支持者は共和党に近い存在でトランプ氏の票を食ったのではないかと指摘されることが多い。だが、バーニー・サンダース氏の支持層である民主党左派には同性婚やマリファナ解禁を支持する急進派が多く、これらの層がクリントン支持を離れてリバタリアン党に票を投じた可能性は十分想定できる。さらに、より民主党と政策

的な親和性が高いと考えられる緑の党が一定以上の票を集めていることを併せて考えれば、第三政党支持層は民主党が守勢に回っているミシガン州、ペンシルベニア州、ウイスクンシン州の選挙の趨勢を左右した可能性は十分考えられるのではないか。

おわりに

選挙結果を分析すると、以下のような事実が浮かび上がる。

第一に、2016年の大統領選挙の投票率は過去三回の選挙よりも低く、民主党の一般得票数が前回選挙に比べて500万票以上も減っていることである。これは共和党の一般得票総数減に比して減少数が大きい。多くの州で民主党の得票数が減って得票率も前回より下がり、マイノリティや若年層の票を共和党に僅かず奪われている。おそらく、これがクリントン氏の敗因である。それをもたらしたのはメール問題やスキヤンダルなどの属人的なマイナスイメージ、クリントン氏に対する不信感だったのであるまいか。

第二に、勝ると予測されていたミシガン州、ウイスクンシン州、ペンシルベニア州の各州でクリントン氏が敗北を喫したことである。これは第三政党支持層の影響ではないかと考えられるが、これらの州で勝利していれば選挙結

果が覆っただけに、ダメージの大きな取りこぼしであったといわざるを得ないであろう。

分裂している民主党を一つにまとめられるだけの力量と人気を兼ね備えた次世代のリーダーを新たに発掘・育成できなければ、民主党の党勢回復は見込めない。また、共和党が2年後の中間選挙、4年後の大統領選挙で勢力を維持できるかどうかは、トランプ新政権が統治上の実績をどの程度残せるかに委ねられている。

表1：民主党／共和党候補の得票数・得票率

民主党候補の一般得票	共和党候補の一般得票	投票率
アル・ゴア 50,992,335 (48.4%)	ジョージ・W・ブッシュ 50,455,156 (47.9%)	54.2%
ジョン・ケリー 59,028,444 (48.3%)	ジョージ・W・ブッシュ 62,040,610 (50.7%)	60.1%
バラク・オバマ 69,456,897 (52.9%)	ジョン・マケイン 59,934,814 (45.7%)	61.6%
バラク・オバマ 65,899,660 (51.1%)	ミット・ロムニー 60,932,152 (47.2%)	58.2%
ヒラリー・クリントン 60,839,922 (47.8%)	ドナルド・トランプ 60,265,858 (47.3%)	55.4% ⁶

表 2：州ごとの 2016 年と 2012 年の得票差・得票率差⁷

州	民主党 (2016 マイナス 2012 年)	共和党 (2016 マイナス 2012 年)
アラバマ	-84,812 (-3.8)	51,000 (2.3)
アラスカ	-29,633 (-3.1)	-34,261 (-1.9)
アリゾナ	-91,577 (0.8)	-216,488 (-4.1)
アーカンソー	-15,680 (-3.1)	30,160 (-0.2)
カリフォルニア	-2,264,349 (1.3)	-1,818,863 (-3.9)
コロラド	-114,903 (-4.3)	-48,696 (-1.7)
コネチカット	-81,723 (-4.2)	3,027 (0.9)
デラウェア	-7,003 (-5.2)	19,619 (1.9)
DC	-6,847 (1.9)	-9,828 (-3.2)
フロリダ	247,989 (-2.2)	442,068 (0)
ジョージア	63,473 (0.1)	-10,065 (-2.0)
ハワイ	-54,805 (-8.2)	633 (2.3)
アイダホ	-23,110 (-5.0)	-13,712 (-5.3)
イリノイ	-42,014 (-2.2)	-17,037 (-1.3)
インディアナ	-120,934 (-6.0)	135,677 (3.1)
アイオワ	-171,733 (-9.8)	67,970 (5.6)

カンザス	-25,938 (-1.8)	-33,625 (-2.5)
ケンタッキー	-50,536 (-5.1)	115,752 (2.0)
ルイジアナ	-29,606 (-2.2)	25,742 (0.3)
メイン	-46,433 (-8.4)	42,562 (4.2)
メリーランド	-179,893 (-1.5)	-98,223 (-0.6)
マサチューセッツ	43,478 (0.1)	-105,245 (-4.0)
ミシガン	-296,771 (-6.9)	163,965 (10.1)
ミネソタ	-179,491 (-5.7)	2,666 (0.4)
ミシシッピ	-100,948 (-4.1)	-32,289 (3.0)
ミズーリ	-168,907 (-6.4)	103,313 (3.3)
モンタナ	-27,318 (-5.7)	6,192 (1.1)
ネブラスカ	-28,223 (-4.0)	10,755 (0.5)
ネヴァダ	6,380 (-4.5)	47,752 (-0.2)
ニューハンプシャー	-21,435 (-4.4)	15,680 (0.9)
ニュージャージー	-101,030 (-3.3)	57,425 (1.2)
ニューメキシコ	-34,611 (-4.7)	-19,913 (-2.8)
ニューヨーク	-15,567 (-3.7)	229,771 (1.4)
ノースカロライナ	-16,317 (-1.7)	69,208 (0.1)

アジア時報

ノースダコタ	-31,440 (-10.9)	27,813 (5.8)
オハイオ	-510,620 (-7.2)	110,577 (4.6)
オクラホマ	-23,759 (-4.3)	56,609 (-1.5)
オレゴン	-35,857 (-3.5)	-11,669 (-1.0)
ペンシルベニア	-145,569 (-4.5)	232,507 (2.1)
ロードアイランド	-29,775 (-7.3)	22,217 (4.6)
サウスカロライナ	-16,472 (-3.3)	7,2146 (0.3)
サウスダコタ	-27,597 (-8.2)	17,091 (3.6)
テネシー	-93,599 (-4.2)	55,072 (1.6)
テキサス	559,692 (2.0)	111,747 (-4.6)
ユタ	-14,572 (3.0)	-343,596 (-26.2)
ヴァーモント	-21,122 (-5.5)	2,352 (1.6)
ヴァージニア	-54,975 (-1.3)	-91,366 (-2.3)
ワシントン	-390,462 (1.3)	-339,960 (-3.0)
ウエストヴァージニア	-50,812 (-9.0)	68,543 (6.4)
ウィスコンシン	-238,775 (-5.9)	-1,499 (2.0)
ワイオミング	-13,337 (-5.3)	3,286 (1.4)

表 3 : 1972 ~ 1980 年と 2004 ~ 2012 年の州ごとの政党支持バランスの比較
(538 による事前予想→実際の選挙結果)⁸

民主党支持→より民主党支持 (10 州 : 116 選挙人)	ミシガン (<u>D, R?</u>)、ワシントン (D, D)、オレゴン (D, D)、デラウェア (D, D)、イリノイ (D, D)、メリーランド (D, D)、ニューヨーク (D, D)、ハワイ (D, D)、マサチューセッツ (D, D)、ロードアイランド (D, D)
共和党支持→民主党支持 (16 州 : 206 選挙人)	ミシシッピ (R, R)、サウスカロライナ (R, R)、ジョージア (R, R)、アリゾナ (R, R)、ノースカロライナ (<u>Toss-Up, R</u>)、フロリダ (<u>Toss-Up, R</u>)、ヴァージニア (D, D)、ニューハンプシャー (D, D)、ネヴァダ (<u>Toss-Up, D</u>)、コロラド (D, D)、ニューメキシコ (D, D)、ニュージャージー (D, D)、メイン (D, D)、コネチカット (D, D)、カリフォルニア (D, D)、ヴァーモント (D, D)
政党支持パターン変化せず (1 州 : 18 選挙人)	オハイオ (R, R)
民主党支持→共和党支持 (6 州 : 61 選挙人)	ミネソタ (D, D)、ウィスコンシン (<u>D, R</u>)、ペンシルベニア (<u>D, R</u>)、ミズーリ (R, R)、アイオワ (R, R)、ウエストヴァージニア (R, R)
共和党支持→より共和党支持 (17 州 : 134 選挙人)	ユタ (R, R)、アイダホ (R, R)、ワイオミング (R, R)、ネブラスカ (R, R)、アーカンソー (R, R)、オクラホマ (R, R)、モンタナ (R, R)、インディアナ (R, R)、ケンタッキー (R, R)、ルイジアナ (R, R)、アラスカ (R, R)、テネシー (R, R)、サウスダコタ (R, R)、テキサス (R, R)、ノースダコタ (R, R)、カンザス (R, R)、アラバマ (R, R)

【参考文献】

- : 飯田健、「2016 年アメリカ大統領選挙、なぜ予測が「外れた」か」『現代化学』2017 年 1 月号。
- : Thomas M. Holbrook, *Altered States: Changing Populations, Changing Parties, and the Transformation of the American Political Landscape* (Oxford University Press, 2016)
- : Harold W. Stanley and Richard G. Niemi, *Vital Statistics on American Politics, 2015-2016* (CQ Press, 2015)

- (1) 本論で用いたデータは主として 11 月 14 日前後のもので、その後数値に変化が出ている可能性がある。
- (2) 数値は Stanley and Niemi 2015、ならびに *American Presidency Project* <<http://www.presidency.ucsb.edu/elections.php>> のものを用いている（最終アクセス日 2016 年 11 月 17 日）。
- (3) Karl Rove, “Donald Trump Won Because Hillary Clinton Flopped.” *Wall Street Journal* <<http://www.wsj.com/articles/donald-trump-won-because-hillary-clinton-flopped-1479342340>>, (最終アクセス 11 月 17 日)。
- (4) Karl Rove, “Donald Trump Won Because Hillary Clinton Flopped.” *Wall Street Journal* <<http://www.wsj.com/articles/donald-trump-won-because-hillary-clinton-flopped-1479342340>>, (最終アクセス 11 月 17 日)。
- (5) ここでのデータは *Politico* <<http://www.politico.com/2016-election/results/map/president>>, のものを用いている（最終アクセス日 11 月 14 日）。
- (6) 2016 年の投票率は CNN のサイトにあるものを用いた。<<http://edition.cnn.com/2016/11/11/politics/popular-vote-turnout-2016/>>, (最終アクセス日 11 月 14 日)。
- (7) 数値は Stanley and Niemi 2015 および <<http://www.politico.com/2016-election/results/map/president>> から作成（最終アクセス日 11 月 14 日）。
- (8) Holbrook 2016 より筆者作成。事前予想は 538 <http://projects.fivethirtyeight.com/2016-election-forecast/?ex_cid=rrpromo> を用いている（最終アクセス日 11 月 14 日）。